

【歴史・民俗】

近代大野鍛冶の出鍛冶文書の紹介

—赤井家資料を通して—

知多市文化財保護委員会 副委員長 松下 孜

はじめに

赤井清功氏(知多市日長三区在住・1937年・昭和12年生)は、近代大野鍛冶に関係する資料を所有している。資料の内訳は、帳面類28冊、葉書450通余、その他(写真・戸籍・小学校卒業証書等)である。その中には、美濃申原(岐阜県恵那市)への出鍛冶文書が含まれている。また、この他に、赤井氏が以前に知多市歴史民俗博物館へ寄贈した文書がある。こちらは目録が作成されており、3箱に分かれて多くの文書が収納されている。これらの文書を調べる内に、次第に出鍛冶のさまざまな様子が判明してきた。今回はこれらの文書の内、近代の出鍛冶の様子がよくわかる文書を選び、内容の紹介をするものである。

1. 赤井弾造家と早川藤吉家の出鍛冶について

赤井家の1907年(明治40年)の戸籍によれば、戸主は赤井弾蔵(1850年・嘉永3年生)であり住所は知多郡旭村大字日長であり、妻まさ(1854年・安政元年生)は同じく旭村の早川藤吉家の出身であった。ただし、近世の村でいうと赤井家は鍛冶屋村にあり、妻まさの出身である早川家は松原村にあった。赤井弾造は妻まさを1879年(明治12年)4月30日に入籍している。弾造29歳・まさ25歳であった。早川藤吉(1826

年・文政9年生)は、おそらく大野(現・常滑市)で鍛冶の腕を磨き、大野鍛冶仲間に入ったと考えられる。明治に入り、出身地の松原村から美濃国申原村へ出鍛冶をするようになった。一方、赤井弾蔵は、早川藤吉親方のもとで、子方として雇われたと思われる。その間に鍛冶の腕や人柄を認められ藤吉長女まさを妻に迎えたのである。1887年(明治20年)代後半に入り、藤吉は引退し、長男の瀧三郎(1857年・安政4年生)に親方の座を譲るのである。瀧三郎は、後に改名し「国三郎」を名乗るようになる。国三郎と團(弾)造の交流を示す葉書があるので紹介する。

表書き「愛知県尾張国知多郡日長村字鍛冶屋村 (消印の年号は「明治三十一年」である。)

赤井團造様

旧九月二日出

美濃申原 かじや 国三郎拝

本文 「早速_ニ申上候、陳_者御堂君様病氣之儀は如何御座候哉、私シ職業は旧九月中頃迄之見込_ニ御座候へば、大上夫_ニ相成候へば、一度御出張被下度、猶又都合_ニて宜る敷候間、此段御心配_ニは無是候間、御報申上候、皆々無事千之助無事、御安心あれ」

松原村の早川国三郎が美濃申原で「かじや」を営業していたことがわかる。また、

赤井團(弾)造も「御堂君様(妻まさ)」が病気でなければ串原村で国三郎と共に鍛冶を行っていたことも推定できる。こうした国三郎と團造の交流を示す葉書は他に数通残されている。

近世の大野谷(常滑市北部・知多市南部)一帯に在住した大野鍛冶は、株仲間をつくり尾張藩に役銀を納め特権と保護を受けた。1773年(安永2年)には、鍛冶屋株が147軒と定められている。この段階になると、鍛冶屋は大野谷を中心に知多半島一帯に広く存在するようになった。大野鍛冶の大きな特徴として、諸国に拠点をもった出稼ぎの出鍛冶である。出稼ぎ先は得意場と称し、株仲間の決まりにより互いに得意場を荒さないこととした。

早川家の出鍛冶先である美濃国串原村と関係してくる得意場について、1868年(慶応4年)の「農鍛冶得意場書上帳」(『知多市誌資料編4』334ページ)には、次のようにある。

「上松原村 西助
一 参州加茂郡
 牛地村
一 濃州恵那郡
 大竹村 小屋有
 右者得意場所ニ而御座候
一 濃州恵那郡
 達原村 河手村
 小田木野村 川渡村
 相花村 閑羅瀬村
 加晒江村 飛先村
 福原村 大野村
 森山村
 右者合壁入合細工仕候 」

この文書によれば、上松原村の西助は参州加茂郡牛地村や濃州恵那郡大竹村・同恵

那郡11カ村を得意場としていたことがわかる。串原村は「松平氏の時代になって本郷八カ村、川通り十三カ村と定まったようである。即ち本郷というのは大平、木根、柿畑に峯、松林、松本、戸中、中沢を加えて八カ村とし、川通りというのは福原、森上、大竹、相走、大野、船渡、久木、漆畑、釜井、閑羅瀬、大築、川ヶ渡、岩倉の十三カ村である。」(『串原村誌』1968年10月23日 串原村役場発行 111ページ)とあり、串原村の中に21カ村の村落があったのである。恵那郡にあった上松原村・西助の12カ村の得意場の多くは串原村の村落やその近辺に含まれていたと考えられる。なお、近世の松原村は「本郷」と「上ヶ松原」の2地区で構成しており、上松原村とあるのは「上ヶ松原」のことである。このように近世には美濃国恵那郡串原村・三河国加茂郡牛地村に上松原村の西助が得意場を築いていたのである。この得意場を早川家が入手するのだが、この間の事情を示す史料は見つからなかった。

恵那郡串原村にあった「小屋や得意場」について明治に入り次の文書が残されている。この文書は正式な文書の下書きと考えられ、破れもあり読みにくいだが大切なことが記されているので次に紹介する。

「預り証
美濃国恵那郡串原村
 字大平式百八十三番戸
一 農鍛冶家屋壺ヶ所
一 諸道具別紙〔 〕通り
右者〔 〕請人立会正ニ預り申処実正也、御入用返却ハ何たりとも速ニ御返済可仕候、為後日預り証券仍テ如件
 但し明治廿五年ヨリ廿九年迄五ケ年ノ間、毎年旧十二月限り、家賃として金

三円宛差出シ可申候約定也
 明治廿四年十一月

当郡日長村
 字松原
 預り主
 請人

大野町〔 〕
 久〔 〕

一横台大つち 式本
 一丸こ 壺本
 一糸前おしこ 壺本
 一長柄小づち 壺本
 一柄たがね 式本
 (11 項目略) 〕

(赤井家文書・知多市歴史民俗博物館蔵)

表紙から、諸道具を預かったのは、知多郡松原村・早川藤吉であり、立合改人は蒲池村・中山松二郎であることがわかる。預かった道具は、勝手道具 23 項目、鍛冶道具等 55 項目があげられており、生活用具から鍛冶道具等にいたるまで、すべてを預かったことがわかる。

この後、早川家の申原村での出鍛冶の活動を示す次の帳面がある。表紙はかすれではっきりしないが裏表紙に「知多郡日長早川瀧三郎」とある。一部を抜き書きしてみる。

「 辰明治二十五年
 鉄^(商標) 式円式拾五銭 同二円八十銭 渡
 一六拾壺円四拾銭 岸 久兵衛
 十二月

一炭壺俵 代七銭五厘
 一米直^(値) だん 代七円
 一鉄百目 拾式
 一細工仕上 三百四十円

(明治 26 年～明治 31 年略)

亥明治三十二年 春仕入

一四円八拾五銭 十二貫入 金吉^(商標) 壺東
 一三円六拾五銭 ^(商標) 壺東 十一貫め
 一三銭四厘 四ト壺寸 百目
 一 同 四つハ 百目
 一七銭 洋鉄
 一三銭八厘 二ト半〇 百目
 一三銭九厘 一ト四 百目
 一三銭六厘 二ト四分 百目

(赤井家文書・知多市歴史民俗博物館蔵)

この文書により、美濃国恵那郡申原村にある農鍛冶家屋 1 カ所と諸道具が貸し出されたことがわかる。別紙の諸道具は次の通りである。

(表紙)

「 明治廿四年卯旧十一月記
 美濃恵那郡申原村鍛冶屋
 諸道具立合改預り帳也

右預り人 知多郡松原村
 早川藤吉

右立合改人 蒲池村

中山松二郎殿明細 〕

(本文)

「 勝手道具

一四升なべ 壺枚
 一式升なべ 壺枚
 一茶釜 壺つ
 一めしひつ 大小式つ
 一米入箱 壺つ
 (29 項目略)
 一やすり 古四本
 一壺貫六百匁掛ル はかり 壺丁
 一式寸五分 吹子 壺はら
 一三寸五分 吹子皮付 壺はら
 一手板 古式枚

(22 項目略)

一中つち 壺本

一八円九拾銭 米ねだん
 一拾銭 炭壺桶
 一拾九銭五厘 新鍬百目
 一拾四銭 八月炭壺桶
 細工年ノ七百円也
 大平春六十八円八拾銭
 一月廿九日ヨリ二月十一日迄
 大竹春三百二十八円九十銭
 二月十五日ヨリ四月十六日迄
 八月大平
 ノ六十壺円
 八月八日ヨリ八月廿二日迄
 八月大竹
 ノ百六十四円五十銭
 八月廿四日ヨリ九月廿五日迄
 冬大平
 ノ五十三円九十銭
 冬大竹
 ノ六十壺円八十銭

(明治33年～明治34年略) (赤井家文書)

この帳面には、上記の様式の記録が1892年(明治25年)から連続して1901年(明治34年)まで記されているので、得意場を預かった翌年から鍛冶屋業を開始し、以後返却することなく営業を続けたことがわかる。赤井家に残された数多くの帳面は以後明治・大正・昭和と続いており、得意場や諸道具は一度も返却される事はなかったのである。この帳面の「細工」より上の項目は、それぞれについて仕入れの単価等が記されている。これによれば年を追って項目が増加しているが、その内容については今後の研究課題である。

1892年(明治25年)の「細工仕上 三百四十円」とあるのは、この年の鍛冶屋営業の総収入である。これだけを取り出してみると、「明治25年340円、同26年392

円、同27年388円、同28年記載なし同29年500円、同30年560円、同31年657円、同32年700円、同33年780円、同34年772円」となっている。目を引くのは、1898年(明治31年)に「大平冬六十壺円、大竹冬二百九十式円拾銭」と小さく後筆挿入されていることである。その後は1899年(明治32年)の記載の様式となっている。おそらく早川藤吉は、いつかは確定できないが、まず出身地である上松原村西助が所有していた串原村出鍛冶の権利を「大竹小屋」を得意場と共に入手したと考えられる。その後1891年(明治24年)に預り証に記された「大平 小屋」が加わったのである。以後、串原村では「大竹 小屋」が細工金額が多いことから主力ではあるが、「大平 小屋」が加わり2か所の鍛冶場で鍛冶屋を営業するのである。1892年(明治25年)くらいから串原村の出鍛冶は、早川瀧三郎(後改名して国三郎)が親方となり、赤井弾蔵も加わり営業をしたのである。鍛冶が行われた日付をみると、まず大平小屋で鍛冶を行い、その分が終了後に大竹小屋で鍛冶が行われたのである。また、春・秋・冬の3回の出鍛冶を行っていたこともわかる。

2. 農鍛冶の注文に農家を廻る資料

出鍛冶の営業は、まず農具等の修理を必要とする農家を廻り、注文を取ることから始まる。鍛冶修理の注文に関して、各農家を廻ったことを示す次の資料を紹介する。表紙「明治三十四年」裏表紙「鍛冶国三郎」

註文帳

丑□□月吉日

(赤井家文書 知多市歴史民俗博物館蔵)
 本文

「十一月二十四日
 一見合 木根 兵吉
 一々 同人
 一見合 本釘 嘉右衛門
 一まど鋤掛 徳松
 一ねり直 小治郎
 (以下略)」
 帳面の記載方法は、はじめに廻った月日が書かれ、次に「木根」とあるように地区

表1 地区別・日付別注文農家軒数(大平分)

地区 年月日	木根	柿畑	峯	松林	馬坂	中沢	浅谷	川ヶ渡	大平	戸中	須測	計
34.11.24	12	7	4	5								28
34.11.25			2		3	2	4	6	1			18
34.11.26	2		1						6	1		10
34.11.29	3		9	5					3			20
34.11.30	5	5	1	1		1	3	3			1	20
34.12.2		2	4				1	1	2			10
34.12.3	2			4					1			7
34.12.5	2	1	2	4					4			13
34.12.6	2								2			4
訪問数	28	15	23	19	3	3	8	10	19	1	1	130
実軒数	24	14	18	13	3	2	8	10	14	1	1	108

※一日に2回訪問する場合がありますので、訪問数より実軒数は少なくなっている。

表2 地区別・日付別注文農家軒数(大竹分)

地区 年月日	森上	ウルイ	鹿ヶ渡	大野	久木	釜井	下村	和戸	小瀧野	戸中	三河	松本	中切	大竹	木根	押山
34.12.8	1	1	2	1	2	1	5	2	1	1	5					
34.12.10							1			1		1	1	3	3	
34.12.12	4	2					1							2		
34.12.13	3		1	3			2	1				1		2		1
34.12.19	2											1	1			
訪問数	10	3	3	4	2	1	9	3	1	2	5	3	2	7	3	1
実軒数	9	3	2	4	2	1	9	3	1	2	5	3	2	7	1	1
地区 年月日	大柳	大平	福原	漆畑	岩倉	乙原	相走	村	閑羅瀬	時瀬	須測	浅谷	川手	城上	計	
34.12.8															22	
34.12.10	5	1	1						1	1	3	6			28	
34.12.12				1	3										13	
34.12.13		1	1			1	1		1				2	1	22	
34.12.19		1						2							7	
訪問数	5	3	2	1	3	1	1	2	2	1	3	6	2	1	92	
実軒数	3	1	2	1	3	1	1	2	2	1	3	6	2	1	84	

※一日に2回訪問する場合がありますので、訪問数より実軒数は少なくなっている。

が書かれ、次に鍛冶修理の農具名や鍛冶方法と注文者名が書かれている。この帳面により廻った農家数を地区別・日付別にまとめると【表1】のようになる。

この表にある地区名は大平地区周辺なので、おそらく大平小屋で鍛冶修理をするため注文に廻ったと考えられる。農家廻りは11月24日から始まり12月6日に終わった。この間の9日間に注文を受けている。1日に廻る軒数は多い日は28軒、少ない日は4軒であった。次に、大竹小屋で修理するのをまとめると【表2】のようになる。

大竹小屋分の注文は、広い範囲の地区を廻っていることが分る。12月8日から始まり12月19日に終わっている。その間の5

日間に注文を受けている。なお、この帳面からは何人で廻ったかは書かれていないので不明だが、早川国三郎以下数名で廻ったと考えられる。訪問件数は、多い日で28軒、少ない日で7軒であった。訪問した地区を地図で示すと【図1】となる。

※この図は、『串原村誌』（前掲）の「図4-2 串原村交通要図」を参照して作成した。

3. 掛け集めの資料

鍛冶修理が終り代金の回収が始まるのだが、この頃の慣習として盆・暮の節季払いとなっていた。代金の請取を記した「請取帳」が作成された。赤井家文書に16冊の「請取帳」が残されているが、1903年（明治36

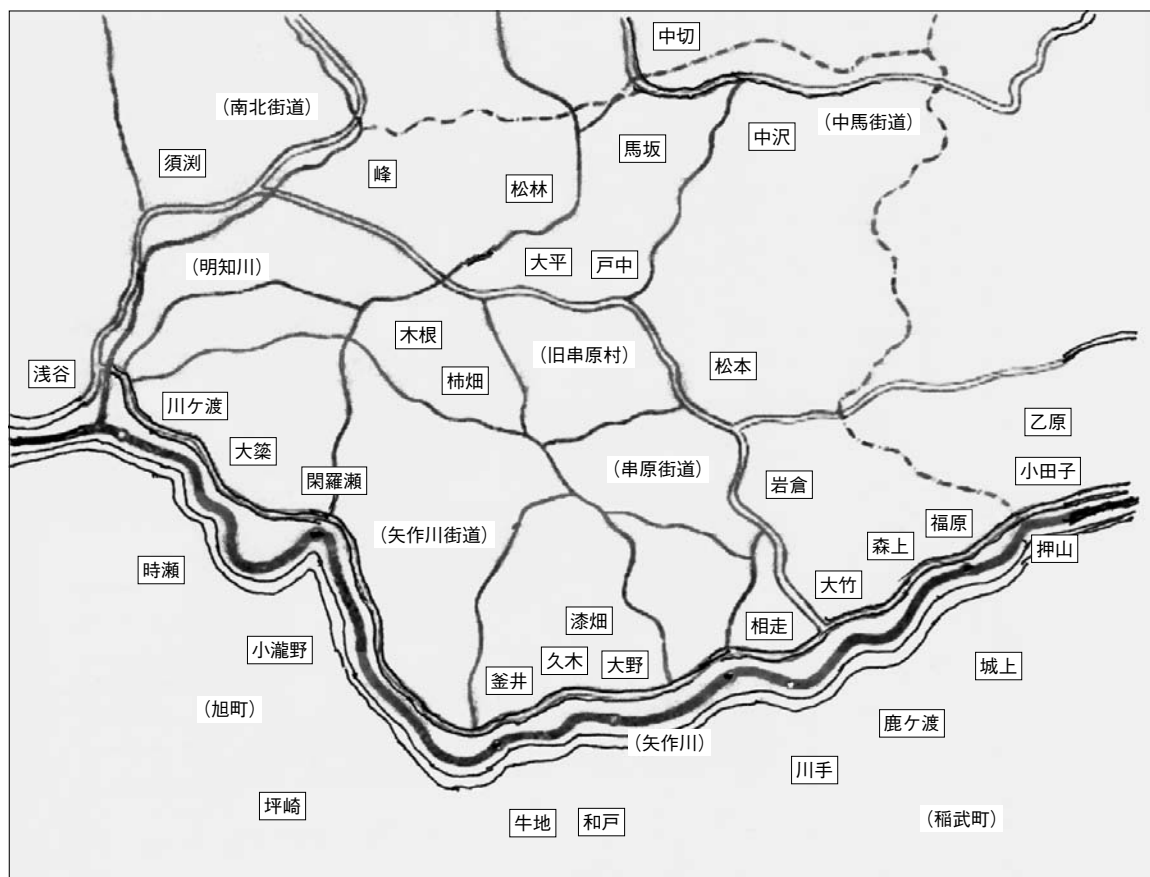


図1 串原の出鍛冶の得意先地区

年)の「請取帳」は4冊が残されているので、この資料を紹介する。

表紙「明治三十六年
請取帳
十二月吉日」
(4冊とも同文)

裏表紙「鍛冶屋国三郎」
「鍛冶屋国三郎 ㊦」
「鍛冶屋国三郎 八太郎控」
「鍛冶屋国三郎 周治郎控」
(赤井家文書)

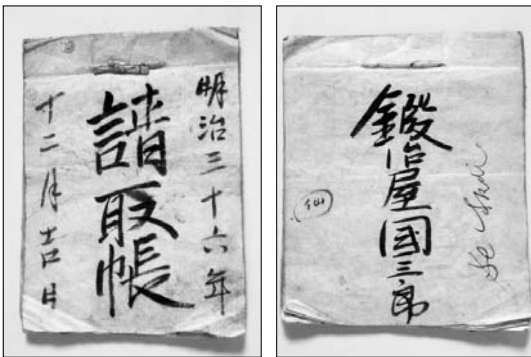


写真1 「請取帳」(表紙) (裏表紙)
※ Se, Akai のサインがある

まず、裏表紙に注目したい。「鍛冶屋国三郎」は先に見た早川国三郎のことである。すべての帳面の裏表紙にしっかりと書かれているので、国三郎が親方として経営していたことがわかる。㊦とあるのは、赤井仙之助のことで、さきの戸籍によれば、赤井弾造・まさの二男で1886年(明治19年)生、1906年(明治39年)没である。若くして逝った仙之助の認めた葉書が幾枚か残されている。また、その若い逝去を悼む人たちの葉書も残されている。八太郎とあるのは、赤井八太郎のことで、同戸籍によれば、赤井弾造・まさの長男で、1881年(明治14年)生、1895年(昭和28年)没である。八太郎は明

治末年頃に改名し、八三郎を名乗るようになる。この赤井八三郎こそ、大正初め頃に串原村の出鍛冶の権利を早川家から譲り請け親方となるとともに、後に旧鍛冶屋村の自宅の一面に鍛冶場を構え、鍛冶屋を営業するようになるのである。周治郎は、国三郎の下で働く鍛冶職人である。国三郎の「請取帳」は、次のように記されている。

「 十八日
木根
一五拾五銭 金五郎
〃 〃
一四拾貳銭五厘 佐治郎
〃 〃
一貳拾六銭五厘 小治郎
(以下略) 」(赤井家文書)

「請取帳」の「十八日」は、表紙に「明治三十六年十二月」とあるので1903年(明治36年)12月18日のことである。はじめに何日に集金したかを記したのである。次にある「木根」は、地区名である。その後集金額と誰から集金したかを記している。この形式は4冊ともすべて一様である。以下に日付・地区・人数を集金人ごとにまとめて【表3】にした。

集金は、八太郎の12月12日に始まり、12月18日に国三郎・仙之助が加わり、さらに12月22日には周治郎が加わり4人で行われ、最終日は、八太郎の12月26日であった。その間に、国三郎は109人、仙之助は81人、八太郎は90人、周治郎は49人から集金している。4人ともこまめに地区を廻り、集金に精を出していることがわかる。

次に、地区ごとに人数や金額を集計すると、【表4】のようになる。

4人で40地区を廻り、総額233円72銭

表3 日付・地区・人数別集金表

月・日	国三郎		仙之助		八太郎		周治朗	
	地区	人数	地区	人数	地区	人数	地区	人数
12・12					森上	1		
12・15					和戸 小瀧野 中切 牛地	2 1 1 1		
12・17					閑羅瀬 三河	2 1		
12・18	木根 柿畑 戸中 松本	11 5 1 1	ウルイ 城上 鹿ヶ渡 川手 森上 福原 乙原 小田子	3 3 1 3 4 1 1 1				
12・20	浅谷	12	須渕 川ヶ渡 大柳	5 6 2	坪崎 田津原	6 3		
12・21	柿畑 木根	7 2	閑羅瀬 三河	6 6	森上	1		
12・22	岩倉 松本 戸中	1 10 3	川手 ウルイ 鹿ヶ渡 松ヶ瀬 閑羅瀬 三河	6 1 1 3 2 3	森上 中切 和戸 小瀧野 牛地 大竹 大野	1 3 4 7 3 1 1	田津原 久武瀬 笹平 漆畑	1 1 1 1
12・23	浅谷	15			須渕 川ヶ渡 時瀬	5 1 5	田津原 中切 牛地	4 2 9
12・24	柿畑 木根 大平 松本	10 14 1 2	福原 下村 森上	3 10 1	川手 漆畑 城上 森上	2 1 1 1	相走 小瀧野 和戸	1 3 1
12・25	下切 松本	12 2	乙原 押山 川手 城上 森上 相走	1 1 1 2 3 1	相走 大野 久木 釜井 田津原 三河 和戸 中切 牛地	3 2 4 2 1 1 3 1 5	川ヶ渡 須渕 下風 時瀬 三河 大竹 岩倉 中切 和戸	2 4 2 1 7 5 2 1 1
12・26					川ヶ渡 久木 釜井 閑羅瀬 浅谷	1 2 1 3 5		
合計		109		81		90		49

表4 地区別集金表

地区	人数	金額	平均金額	地区	人数	金額	平均金額
浅谷	32	25円24銭	79銭	城上	6	2円59銭	43銭
木根	27	14円64銭	54銭	相走	5	4円71銭	94銭
柿畑	22	13円68銭	62銭	福原	4	2円03銭	51銭
三河	18	10円89銭	61銭	戸中	4	1円41銭	35銭
牛地	18	7円31銭	41銭	ウルイ	4	82銭	21銭
松本	15	14円66銭	98銭	大野	3	2円89銭	96銭
須測	14	9円91銭	71銭	松ヶ瀬	3	2円52銭	84銭
閑羅瀬	13	13円53銭	1円04銭	釜井	3	2円08銭	69銭
森上	13	11円75銭	90銭	岩倉	3	1円25銭	42銭
下切	12	11円46銭	96銭	大柳	2	4円08銭	2円4銭
川手	12	5円15銭	43銭	下風	2	2円68銭	1円34銭
小瀧野	11	13円48銭	1円23銭	鹿ヶ渡	2	77銭	39銭
和戸	11	4円90銭	45銭	漆畑	2	57銭	29銭
川ヶ渡	10	7円18銭	72銭	乙原	2	52銭	26銭
下村	10	4円70銭	47銭	久武瀬	1	2円	2円
田津原	9	8円56銭	95銭	笹平	1	59銭	59銭
中切	8	4円20銭	53銭	大平	1	40銭	40銭
坪崎	6	6円77銭	1円13銭	押山	1	10銭	10銭
久木	6	5円35銭	89銭	小田子	1	2銭	2銭
大竹	6	4円64銭	77銭				
時瀬	6	3円69銭	62銭	合計	329	233円72銭	71銭

※厘の単位で四捨五入した。

を集金した。1地区で10人以上集金する地区が鍛冶屋営業の基盤であろうが、5人以下の地区も数多いので、遠く離れた地区の数少ない人たちの鍛冶も引き受けていたことがわかる。串原村やその周辺は山深い集落が多く含まれている。交通手段が「徒歩」であったことを考えると山深い各地域を廻って注文を取るのも大変だが、同じく各地域を廻って集金するのも大変なことであったと思われる。

4. 掛集めの困難な様子を示す資料

これまでに見たように掛集めは手分けして行われたのだが、先の帳面を見る限りは、

順調に集金したかに見えるが、次の資料を見ると決してそうではなかったことがわかる。1911年(明治44年)の「掛集帳」は8冊あり、これを紹介する。

表紙「明治四拾四年

岩倉

掛集帳

松本

亥七月吉日」

本文

「春吉様

一壺円七十九銭 不足

四月六日

一五銭五厘 ツモ打

同
一八錢五厘 ○二丁
九日
一三十錢 大つる掛
十一日
一廿六錢 大作掛
十四日
一三十七錢五厘 大作打 〆二円八十六錢
七月八日 五十錢入
九月五日 五十錢
(中略)
権左衛門様
三月六日
一貳拾八錢五厘 先掛
同
一廿九錢五厘 半先
十四日
一四錢五厘 押手直
十五日
一九錢五厘 上れん直
廿日
一三十四錢 大中先
廿六日
一廿九錢五厘 半先

一 三錢 桂打
〆壹円三十九錢
六月二十四日 右相済
(以下略)]
裏表紙「鍛冶八太郎」
(赤井家文書・知多市歴史民俗博物館蔵)
(裏表紙は、すべて「鍛冶八太郎」となっている
ので、この頃から赤井八太郎が一人前の職人として力をつけ、鍛冶屋営業の中心となってきたことがわかる。)

この帳面の記載形式は、はじめに掛集めの対象人の名前が書かれ、次に前回までに負債があれば金額が書かれ「不足」と記される。次に鍛冶の日付とその料金・鍛冶の内容が記され、最後に、合計の集金額が記され、皆済されれば「相済」と記される。そこで、地区ごとに前回までの負債額(人数)・今回の鍛冶料金(人数)・今回の集金額(人数)・今回の負債残額(人数)等を一覧表にすると【表5】のようになる。

掛集めの対象となったのは、392人である。そのうち今回までに負債のある人、138人、負債額176円29銭であった。ほぼ34%の人が負債者であり、負債額はこ

表5 負債・鍛冶料金・集金額・負債残額等一覧表

地区(人数)	前回負債額(人数)	鍛冶料金(人数)	集金額(人数)	今回負債額(人数)
岩倉・松本(49)	35円92銭(25)	39円22銭(35)	40円92銭(34)	34円22銭(24)
川ヶ渡・須渕(34)	5円93銭(6)	39円27銭(33)	36円80銭(31)	8円40銭(9)
大竹・福原(31)	41円03銭(16)	35円03銭(30)	33円40銭(20)	42円66銭(18)
木根・柿畑(56)	14円59銭(15)	44円10銭(53)	44円61銭(49)	14円08銭(10)
浅谷(43)	17円80銭(16)	37円35銭(37)	37円35銭(35)	17円80銭(16)
牛地・小瀧野(61)	15円66銭(18)	55円74銭(52)	53円73銭(49)	17円67銭(17)
釜井・相走(76)	37円91銭(32)	48円75銭(55)	60円66銭(58)	26円00銭(26)
閑羅瀬・三河(42)	7円45銭(10)	49円70銭(40)	48円96銭(38)	8円19銭(11)
合計(392)	176円29銭(138)	349円16銭(335)	356円43銭(314)	169円02銭(131)

※「明治四拾四年 掛集帳」8冊 (赤井家文書・知多市歴史民俗博物館蔵)により作成
※厘の単位で四捨五入した。

表6 當座帳の書式

3月6日	岩倉	69 銭	大先掛	宇三郎
	松本	83 銭	大々中先掛	銀弥
	〃	78 銭	金鍛中先	初二郎
	木根	95 銭	丁場先掛	初二郎
	松林	78 銭	金鍛大中先	勝輔
	〃	85 銭	金鍛本先	兼太郎
	〃	85 銭	金鍛本先	新市
	〃	83 銭	金鍛大々中先	信二郎
	柿畑	88 銭	金鍛小中先中元掛	久助
	木根	98 銭	金鍛元付先	佐二郎

表7 日付別鍛冶件数と鍛冶料金

月・日	件数	金額	月・日	件数	金額	月・日	件数	金額
(2.5)	(9)	5 円 48 銭	3.2	16	9 円 73 銭	(4.1)	(5)	(4 円 73 銭)
2.6	17	11 円 10 銭	3.3	17	10 円 33 銭	(4.4)	(9)	(11 円 06 銭)
2.7	13	7 円 52 銭	3.4	7	10 円 45 銭	4.5	12	10 銭 11 銭
2.9	17	12 円 31 銭	3.5	15	11 円 88 銭	4.7	14	11 円 40 銭
2.10	13	8 円 58 銭	3.6	11	9 円 15 銭	4.8	18	14 円 57 銭
2.11	16	10 円 94 銭	3.8	19	10 円 71 銭	4.9	14	12 円 93 銭
2.12	12	5 円 11 銭	3.9	13	8 円 60 銭	4.10	14	10 円 10 銭
2.13	13	9 円 00 銭	3.10	15	11 円 09 銭	4.11	9	9 円 01 銭
2.14	9	5 円 83 銭	3.11	14	9 円 44 銭	4.13	17	14 円 14 銭
2.18	7	6 円 75 銭	3.13	16	11 円 39 銭	4.14	15	11 円 15 銭
2.19	5	8 円 65 銭	3.14	14	13 円 91 銭	4.15	22	18 円 17 銭
2.20	13	11 円 31 銭	3.15	8	11 円 24 銭	4.16	18	12 円 44 銭
2.21	14	9 円 51 銭	3.16	12	13 円 98 銭	4.18	18	14 円 90 銭
2.22	10	8 円 83 銭	3.17	9	8 円 73 銭	4.19	19	14 円 78 銭
2.23	19	11 円 33 銭	3.18	14	9 円 76 銭	4.20	7	9 円 70 銭
2.24	15	12 円 36 銭	3.19	14	10 円 91 銭	4.21	13	13 円 79 銭
2.26	16	15 円 05 銭	3.20	12	10 円 35 銭			
2.27	12	6 円 42 銭	3.21	12	23 円 64 銭			
2.28	18	12 円 40 銭	3.23	13	11 円 02 銭			
2.29	11	10 円 15 銭	3.24	14	13 円 45 銭			
			3.25	14	18 円 81 銭			
			3.26	16	12 円 17 銭			
			3.27	12	13 円 67 銭			
			3.28	12	7 円 33 銭			
			3.29	15	12 円 45 銭			
			3.30	14	10 円 95 銭			
合計	259	188 円 63 銭	合計	348	305 円 14 銭	合計	224	192 円 98 銭

※()は破損があるため、推定したことを示している。

※厘の単位で四捨五入した。

の度の鍛冶料金の51%に達している。この負債状態は、この度の集金後もほとんど変わることなく、負債者は131人、負債額169円2銭であった。掛け金の集金に相当苦勞している様子が浮かんでくる。

5. 鍛冶屋の仕事と料金の資料

鍛冶屋の毎日の仕事と、どのくらいの料金となるのかがよくわかる帳面が残されているので次に紹介する。

表紙「丙 大正拾五年
當座帳
寅 正月吉日」
裏表紙「東濃恵那郡串原村
鍛冶屋業
赤井八三郎」(赤井家文書)

本文の書式は【表6】のとおりである。(縦書きを横書きとした)

帳面は、青色の罫線で縦10行、横5行に仕切られている。一番上に日付があり、次に地区名→鍛冶料金→鍛冶対象・方法→名前が記されている。また、1日ごとに料

金が集計されている。最初の数ページが破損しているが、日付の最初は2月6日、最後は4月21日である。途中一枚が破損しているが、他は問題ない。

【表7】は、この帳面により日付ごとに、何件の鍛冶仕事をし、鍛冶料金はいくらであったのかをまとめたものである。

鍛冶仕事は、2月に20日、3月に26日、4月に16日、合計62日間行われた。その間に、2月に259件、3月に348件、4月に224件、合計831件の鍛冶仕事をした。鍛冶料金の総額は686円75銭であった。1日平均13.4件ほどの仕事をこなし、1日平均11円8銭ほどの鍛冶料金を得ていたことになる。

次に、どんな鍛冶仕事が行われ、何を鍛冶仕事の対象としたかを鍛冶料金とともに【表8】にまとめた。

鍛冶仕事で多いのは、金鍬・備中鍬・藤(唐)鍬・まと鍬等の鍬類である。また先掛・大作等と表記されたのは、おそらく風呂鍬が省略されたと考えられ、それぞれ風呂鍬

表8 鍛冶種類と鍛冶料金

番号	鍛冶種類	件数	金額	1件平均金額
1	金鍬先掛	75	48円53銭	65銭
	金鍬中先	37	27円99銭	76銭
	金鍬大先掛	22	15円02銭	68銭
	金鍬大先	19	13円10銭	69銭
	金鍬大中先	13	9円76銭	75銭
	金鍬半先	11	7円91銭	72銭
	金鍬大々中先	10	8円35銭	84銭
	金鍬先	9	5円49銭	61銭
	金鍬本先	7	7円43銭	1円06銭
	金鍬掛	7	6円99銭	1円
	金鍬元付等	7	4円38銭	63銭
	その他	23	25円60銭	1円11銭
		小計	240	180円55銭
2	備中掛	28	32円25銭	1円15銭
	大作備中掛	12	13円77銭	1円15銭
	大備中掛等	7	13円38銭	1円91銭

	備中大掛	7	9 円 93 銭	1 円 42 銭
	四本大作備中掛	4	4 円 98 銭	1 円 25 銭
	四本備中掛	4	4 円 91 銭	1 円 23 銭
	その他	11	12 円 83 銭	1 円 17 銭
	小計	73	92 円 05 銭	1 円 26
3	大先掛	50	35 円 26 銭	71 銭
	先掛	46	29 円 84 銭	65 銭
	半先掛	34	24 円 66 銭	73 銭
	中先掛	10	7 円 48 銭	75 銭
	小中先掛	10	7 円 43 銭	74 銭
	大中先掛	9	7 円 20 銭	80 銭
	中先掛	4	3 円 11 銭	78 銭
	その他	6	4 円 04 銭	67 銭
	小計	169	119 円 02 銭	70 銭
4	大作打	24	23 円 87 銭	99 銭
	大作打かへ等	13	14 円 03 銭	1 円 08 銭
	大作掛	10	5 円 77 銭	58 銭
	大作先	8	3 円 40 銭	43 銭
	大作元付	5	2 円 13 銭	43 銭
	その他	14	9 円 15 銭	65 銭
	小計	74	58 円 35 銭	79 銭
5	藤鋏掛	15	9 円 56 銭	64 銭
	その他	18	16 円 71 銭	93 銭
	小計	33	26 円 27 銭	80 銭
6	ねり直等	23	58 円 62 銭	2 円 55 銭
7	桂打等	20	2 円 18 銭	11 銭
8	官はし掛等	15	15 円 39 銭	1 円 03 銭
9	すき先掛等	17	14 円 58 銭	86 銭
10	子供○打等	13	5 円 23 銭	40 銭
11	まと鋏先掛等	11	10 円 79 銭	98 銭
12	三本こ打	10	2 円 48 銭	25 銭
13	斧掛等	9	14 円 04 銭	1 円 56 銭
14	上れん直等	8	5 円 89 銭	74 銭
15	鎌	7	6 円 75 銭	96 銭
16	丁場先掛等	6	8 円 53 銭	1 円 42 銭
17	火はし直等	5	1 円 57 銭	31 銭
18	鉄びん官打等	4	2 円 00 銭	50 銭
19	名た直等	4	1 円 14 銭	29 銭
20	大鋏先掛等	4	2 円 99 銭	75 銭
21	春日井作り等	4	97 銭	24 銭
22	その他	82	57 円 36 銭	69 銭
	合計	831	686 円 75 銭	83 銭

※鍛冶種類が3件以下は、すべて「その他」とした。

※鍛冶種類の中に、少しだけ種類が違うものが入っている場合は「等」をつけた。たとえば「斧掛4 斧先1 斧ひつかへ 1斧ひつ直1・・・」は「斧掛等」とした。

※厘の単位で四捨五入した。

先掛・風呂鍬大作等であったと推定できる。これら鍬類を合計すると600件の鍛冶仕事となり全体の72%余となる。その他にも上れん(鋤簾)・すき(鋤)・名た(鉋)・斧等、農林業に係る種類もある。赤井八三郎の鍛冶仕事の大半は、農業に係る鍬類と一部林業に係る斧等であった。まさに農鍛冶であったことがわかる。

鍛冶仕事の料金は農鍛冶組合で定めている。1915年(大正4年)の「定」によれば【表9】のとおりである。

表9 鍛冶料金

金額	鍛冶種類
30 銭	鍬備中新 ^{打百匁代}
34 銭	ヒツ備中 全上
18 銭～28 銭	鋼ナキ物 全上
30 銭～50 銭	鍬 掛 代
45 銭～65 銭	丁場鍬掛代
26 銭	株堀掛代
6 銭	押切掛代 ^{巻寸二付}
1 円 15 銭	上連板かへ ^{但九寸}

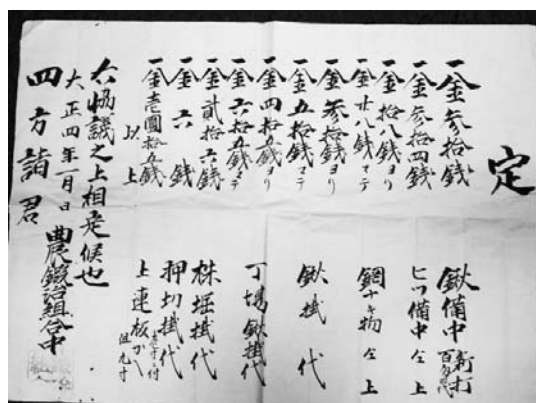


写真2 「定」

(赤井家文書 知多市歴史民俗博物館蔵)

6. 子方の働く日数や日当の記された資料

子方の働く様子が記された「人足記」(赤井家文書)があるので紹介する。裏表紙に

「□□□瀧三郎」とあるので早川瀧三郎が記した帳面である。そこには、1891年(明治24年)より1913年(大正2年)の間に雇った子方の名前・働いた月日と合計、給金等が記されている。表紙の「人足」とあるのは子方のことである。子方というのは、親方に対しての子方のことであり、弟子のことである。この帳面にある子方は、すべて給金を得ているので、無給の弟子修行を終えて一人前の職人として認められた人たちである。一人前の鍛冶職人になるには弟子入りしてから5～6年ほどかかるといわれている。この帳面により子方の村と名前を一年ごとに書上げると【表10】になる。

この表により、子方の人数は年により差があるが、1894年(明治24年)から1903年(明治36年)までは、1人から3人で、それ以後大正2年まで、3人から6人と人数が増加している。子方の出身地は、近世の村名で記されており、ほぼ、大野谷と呼ばれた常滑市北部・知多市南部の一带である。

次に1894年(明治27年)の二人の子方の働く様子や給金を【表11】にまとめた。

1894年は、最初は1月27日から鍛冶を開始し、4月13日に終了した。これは春鍛冶といわれる。続いて、8月4日開始、9月23日終了。これは秋鍛冶といわれる。最後に11月21日開始、12月22日終了である。帳面には「冬」と記されている。冬鍛冶も行われていたことがわかる。大野鍛冶の出稼ぎは、普通春鍛冶と秋鍛冶の2回が一般的といわれるが、3回目の冬鍛冶にも出ていたのである。「工」とあるのは、この間に働いた日数である。働いた日数により給金が支払われ、「工料」と記されている。日当は筆者が計算したので()に入れた。

表 10 子方の名前一覧

和暦	職人名(村)	職人名(村)	職人名(村)	職人名(村)	職人名(村)	職人名(村)
明 24	山田米太郎					
明 25	山田米太郎					
明 26	山田米太郎	中村兼太郎(大)		早川浅治郎(松)		
明 27		中村兼太郎(大)	要助(小)	早川浅治郎(松)		
明 28				早川浅治郎(松)	竹内兼太郎(松)	
明 29	五兵衛(北)	中村兼太郎(大)		早川浅治郎(松)	竹内兼太郎(松)	
明 30	五兵衛(北)		源治郎(北)			
明 31	伊兵衛(前)		要助(小)	文治郎(鍛)		
明 32	清兵衛(大)			文治郎(鍛)		
明 33	文之右衛門	松次郎(松)				
明 34	文之右衛門	松次郎(松)				
明 35	文之右衛門	松治郎(羽)	梅之助(松)			
明 36		松治郎(羽)	梅之助(松)			
明 37	松太郎(羽)	松治郎(羽)	梅之助(松)	梅吉(羽)		
明 38		松治郎(羽)	梅之助(松)	梅吉(羽)		
明 39		松治郎(羽)	梅之助(松)	梅吉(羽)		
明 40	八太郎(鍛)		梅之助(松)	梅吉(羽)		
明 41	八太郎(鍛)		梅之助(松)	梅吉(羽)		
明 42	八太郎(鍛)	周治郎(松)	梅之助(松)	梅吉(羽)	豊助(宮)	
明 43	八太郎(鍛)	周治郎(松)	梅之助(松)	梅吉(羽)	豊助(宮)	
明 44	八太郎(鍛)	周治郎(松)	梅之助(松)	千太郎	豊助(宮)	九三郎(宮)
大元	八太郎(鍛)	周治郎(松)	梅之助(松)	千太郎		九三郎(宮)
大 2	八太郎(鍛)	周治郎(松)	梅之助(松)	千太郎	惣吉	九三郎(宮)

※(大)は大野村・(小)は小倉村・(松)は松原村・(羽)は羽根村・(鍛)は鍛冶屋村・(北)は北粕谷村・(宮)は宮山村・(前)は前山村であり、近世の村名である。()がないのは、村名が不明の者である。

※和暦の「明」は明治、「大」は大正である。(以下同)

表 11 子方の勤務日数・給金等

	大野・中村兼太郎					松原村・早川浅治郎				
	月・日	月・日	工	工料	日当	月・日	月・日	工	工料	日当
明 27	1.16	4.13	85	6 円 41 銭	(7.5 銭)	1.22	4.13	80	8 円 10 銭	(10.1 銭)
	8.4	9.23	50	3 円 75 銭	(7.5 銭)	8.4	9.23	50	5 円 00 銭	(10 銭)
	11.21	12.22	31	2 円 32 銭	(7.5 銭)	11.21	12.28	37	3 円 70 銭	(10 銭)

※()は、工料÷工で、筆者が計算したもの

おそらく子方は、賄いつきの職人と考えられるので、日当が10銭ほどと少なくとも生活できたのであろう。

次に、松原村・梅之助、松原村・松治朗、

鍛冶屋村・八太郎の働く様子や給金等をつぎの【表 12】にまとめた。

先に見たように、ここでも春鍛冶・秋鍛冶・冬鍛冶の年間3回の出鍛冶となってい

表 12 三人の子方の勤務日数・給金等

和暦	松原村・梅之助				松原村・松治朗					
		工	工料	日当		工	工料	日当		
明 35	冬	32	2 円 80 銭	(8.8 銭)	冬	32	2 円 24 銭	(7 銭)		
明 36	春	75	7 円 12 銭	(9.5 銭)	春					
	(秋)		3 円 50 銭		(秋)					
	冬		4 円 09 銭		9.5 銭				冬	
明 37	春	100	9 円 50 銭	9.5 銭	春					
	(秋)		5 円 00 銭		(秋)					
	冬		4 円 30 銭		(10 銭)				冬	
明 38	春	57	8 円 00 銭	10 銭	春					
	(秋)		5 円 70 銭		(秋)					
	冬		4 円 10 銭		10 銭				冬	
明 39	春	80	8 円 00 銭	10 銭	鍛冶屋村・八太郎					
	(秋)		6 円 25 銭						(11 銭)	
	冬		4 円 40 銭		11 銭	冬	86	3 円 00 銭	(3.5 銭)	
明 40	春	57	7 円 96 銭	11 銭	春	57	4 円 20 銭	3.5 銭		
	(秋)		6 円 27 銭		(秋)		2 円 00 銭			
	冬		5 円 04 銭		12 銭		冬		42	2 円 10 銭
明 41	春	74	7 円 96 銭	(10.8 銭)	春	54	4 円 00 銭	6.5 銭		
	(秋)		7 円 02 銭		(秋)		3 円 51 銭			
	冬		5 円 20 銭		13 銭		冬		40	2 円 80 銭
明 42	春	82	10 円 66 銭	13 銭	春	86	6 円 02 銭	7 銭		
	(秋)		7 円 25 銭		(秋)		4 円 00 銭		7 銭	
	冬		5 円 80 銭		14.5 銭		冬		40	3 円 60 銭
明 43	春	60	10 円 20 銭	17 銭	春	88	8 円 80 銭	10 銭		
	(秋)		10 円 80 銭		(秋)		50		5 円 00 銭	10 銭
	冬		6 円 12 銭		18 銭		冬		34	3 円 74 銭
明 44	春	70	14 円 00 銭	20 銭	春	67	(7 円 37 銭)	11 銭		
	(秋)		8 円 80 銭		(秋)		57		7 円 50 銭	(13.2 銭)
	冬		7 円 60 銭		20 銭		冬		38	4 円 56 銭
大元	春	81	16 円 20 銭	20 銭	春	82	11 円 00 銭	(13.4 銭)		
	(秋)		11 円 80 銭		(秋)		55		8 円 26 銭	15 銭
	冬		7 円 60 銭		20 銭		冬		38	5 円 51 銭
大 2	春	82	16 円 40 銭	20 銭	春	80	12 円 00 銭	15 銭		
	(秋)		11 円 60 銭		(秋)		58		9 円 28 銭	16 銭
	冬		7 円 80 銭		20 銭		冬		39	6 円 30 銭

※(秋)は、帳面にこの言葉はないので、筆者が書き加えたものである。

※()の数字は、筆者が計算したものである。

※厘の単位で四捨五入した。

ることがわかる。この当時の鍛冶職人の賃金は、日当×日数で計算するので、日当が賃金の基準である。梅之助は、1903年(明治36年)に年収14円71銭、日当9.5銭か

ら始まり、少しずつ年収・日当を増加させ、1911年(明治44年)に年収30円40銭、日当20銭になった。以後1912年(大正元年)・大正2年と日当20銭と安定するので、こ

の年代では日当 20 銭ほどが一人前の熟練した鍛冶職人の日当であると考えられる。次に松治朗は、雇われた年数も 4 年と短く、日当も低く抑えられている。このことから松治朗は、親方が年毎に雇う子方であったと思われる。八太郎は、1906 年(明治 39 年)に日当 3.5 銭から始まり、少しずつ年収・日当を増加させ、1913 年(大正 2 年)に年収 27 円 58 銭、日当 16 銭となった。八太郎は、明治 39 年に 25 歳・大正 2 年に 32 歳であるので、徐々に鍛冶職としての腕を磨き、親方に認められ、日当も増加し梅之助の 20 銭にせまる 16 銭となっている。

おわりに

ここに紹介したのは、赤井家所蔵の資料・知多市歴史民俗博物館所蔵の赤井家資料のほんの一部である。紹介の仕方も帳面が多いことから「表」として多くをまとめている。その紹介の仕方も未熟な面が多々あると思われる。また、これらの他にも大野鍛冶の出鍛冶の様子がわかる資料として貴重なものも残されている。これまで大野鍛冶の出鍛冶先の資料はそんなに多く見つかっていない。近代の大野鍛冶の出鍛冶に関する赤井家の資料は貴重なものと判断できる。これら資料は鍛冶研究者に大きく貢献すると考えられるので、つたないながら資料紹介とした。